［地域防災学Ⅱ　成果発表スライド］

地域防災学Ⅱ
総合防災訓練班活動報告

名前：　佐木結衣　矢野海音　駒田雅愛　梅津花奈　古内生駿　二階堂麗　高橋心花

プロジェクト名：防災ワークショップ

目次

01　目的・背景
02　活動内容
03　結果・成果
04　今後の課題
05　解決策

企画の背景

ダンボール椅子

ダンボールとビニール紐で簡単に作れます。体重50kgの人でも支える

（夏休みまでの活動）
- 身近な被災者へインタビュー
- 班ごと防災の体験実習活動・まとめ
- 大学生の講義をもとに幼稚園へ授業（避難所の感染対策）

↓

加美町の様々な年代の町民に対して、防災学習の場がつくれないだろうか

企画の目的

年代関係なく加美町の防災意識を高めるため
↓
幼児・保護者・大人・高齢者みんなが参加できる防災学習の場を作りたい

当日の活動内容（概要）

- 加美町総合防災訓練(11/16)のメイン会場でワークショップを行う。
- キッチンペーパーでマスク作り、新聞紙でスリッパ作りを教える。

『作り方を教える』

日程・場所など

- 日程：11/16（日）10：00～12:00
- 場所：小野田体育館
  （宮城県加美郡加美町長檀13）
- 来場見込み：
  80名くらい

当日までの準備１

○ワークショップ内容の決定（9/２９）
スリッパ（新聞紙）作り
マスク（キッチンペーパー）作り
に決定。

理由
①身近な物で作れる
②災害時にすぐ役立つから
③子供から高齢者まで作りやすい

当日までの準備２

○準備作業(10/20)
- 実施マニュアル作り開始
- ポスター・チラシ作り
- 必要物品の確認

○地域防災学Ⅰと合流（10/27）
- 地域防災学Ⅰの2年生にワークショップの目的などを説明
- 作り方の実習
- 必要物品の確保

運営マニュアル（20ページ）

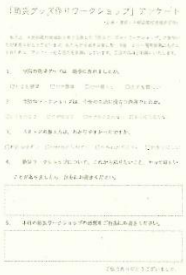
- 目標
- 開催概要（日程・場所・連絡先・見込み人数等）
- タイムスケジュール
- 役割分担
- 会場図（机の配置等）
- 準備物
- 各係の当日の動き詳細
- 当日までの準備について
- ポスター・チラシ
- アンケートの内容　　・今後の予定

当日の様子

当日使った資料

ブース前看板↓

アンケート



結果・成果

- スリッパ作り26人・マスク作り17人来場
- 「今後役に立つ・教え方がわかりやすい」の声
- 幅広い年齢層の参加者

↓

- 作り方を覚えて、制作物を持ち帰れたので家庭での防災意識が向上した
- 交流のきっかけになった
  （企業ブース・町長・県防災推進課・婦人クラブ）

課題

- 想定よりも来場者が少なかった
- 呼び込みが十分に出来なかった
- スタッフの役割分担を徹底できていなかった。
- スタッフそれぞれの積極性に違いがあった。
- 参加者の声を直接聞けなかった

解決策

- いろいろな宣伝方法を考える（回覧板、チラシの配布、webなど）
- 自分の役割を理解して動けるように、事前にねらいや仕事内容を話し合っておく
- 予想外のことについても、話し合っておく
- 準備期間を長くする

まとめ

- 身近な物を使った防災ワークショップを企画した
- 準備から実施まで計画的に進めることができた
- 地域の人に防災を身近に感じてもらうことを目指した

ご清聴
ありがとうございました!

［地域スポーツ学Ⅱ　成果発表スライド］

学籍番号：3104　名前：内海区音
3216　玉岡結人
3321　宮澤桜花
プロジェクト名：地域防災研修会

目次

01 企画の背景
02 企画の目的
03 企画の概要
04 結果・成果
05 課題
06 まとめ
07 お世話になった方

企画の背景

5月
HUGを体験
※HUG…避難所運営ゲーム

6月
加美町危機対策課の方から避難所運営に関する授業

企画の背景

中新田高校が避難所になったらどうなるか町民の皆さんと考えてみたい！

研修会を開こう！

企画の目的

地域の**防災・減災意識**の向上
防災分野における**地域課題**の検討

企画の概要

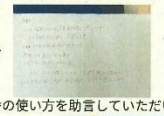
- 研修会のチラシ作成
- 中新田高校避難所マニュアルの確認
- 校舎内の確認
- 防災研修会の実施・運営

作成したチラシ

高橋さんと打ち合わせ

避難所運営マニュアルを読んで気になったところを質問

質問したいことのメモ→



校舎を見ていただき、校舎の使い方を助言していただいた

⇨**当日の図面作成や校舎案内に反映**

校舎案内

結果・成果

- 各グループ、**人数や性別に応じて**しっかりと割り振ることができた
- 「高校生と一緒に考えることで新しい発見があった」「イメージトレーニングの大切さがわかった」などの感想が寄せられた
- 外部から16名の地域の方に参加していただけた

課題

- 感染者の部屋割
- ペットの対応

- 避難所の運営でどんな判断が必要になるのか知らない人が多い
- 地区の全体像が分かっていない

今後の展望

1. 地域と学校が一緒に防災について話し合う機会を設ける
2. 「中高に避難するのはどんな人たちか」学校／地域／役場で知っておく

まとめ

- チラシ作りや校舎見学のルート策定などを自主的に行えた。
- 地域住民に避難所の運営をイメージしてもらえた。
- 避難所となる中高のつくりを確認してもらえた。
- 今後も地域で防災について話し合う機会を設けていく必要がある。

お世話になった方

防災士会みやぎ
副理事長　高橋　健一　さま

- 立ち入り禁止場所の助言
- 避難所運営の基礎知識についての講義
- HUGの演習

お世話になった方

加美町危機対策課
課長補佐　鎌田裕充　さま

- 避難所運営に関する出前授業

お世話になった方

中新田城内行政地区長
齋藤　實　さま

- 近隣住民への参加呼びかけ

ご清聴ありがとうございました！

（２）「総合的な探究の時間」　～　１学年「加美町探究」　～

１学年の「総合的な探究の時間」においては、地元である加美町の風土や伝統文化、食、観光などをテーマに、地域社会の魅力を再発見し、情報として発信していく学びを行った。昨年度の１学年が取り組んだ探究活動をベースに生徒個人が興味関心のあるテーマを設定し、さらにテーマごとに小グループを編成して活動を行った。特に探究した内容を地域に還元することを目標に活動に取り組み、来年度の地域の行事で成果物の展示や配布を行う計画である。

◆探究グループ一覧◆

①	加美町フード「スイーツ」
②	加美町フード「ラーメン」
③	やくらい「風景」
④	やくらい「食べ物」
⑤	やくらい「イベント」
⑥	アウトドア・釣り「加美町の釣りの現状と今綿湿地にできること」
⑦	アウトドア・キャンプ「知っているようで知らない加美町の自然の魅力」
⑧	アウトドア・星空観察１班
⑨	アウトドア・星空観察２班
⑩	アウトドア・BBQ「BBQ を楽しむ豆知識とその実践」
⑪	食べ歩きスタンプラリー「１班・冬の加美町スタンプラリー齋虎班」
⑫	食べ歩きスタンプラリー「２班・冬の加美町スタンプラリーピッチョーネ班」
⑬	虎舞・初午「虎舞を後世に伝えよう」

◆探究活動の流れ◆

4 月		10 月	実地調査、訪問活動(放課後、休日)
5 月	前年度探究内容の確認	11 月	実地調査、訪問活動(放課後、休日)
6 月	テーマ選択及び決定	12 月	実地調査、訪問活動(放課後、休日)
7 月	活動計画作成(授業内、放課後)	1 月	活動のまとめ、発表準備
8 月	実地調査、訪問活動(夏休み中)	2 月	学年報告会・全体報告会 (6 グループが学年から代表として参加)
9 月	中間報告会(学年内)	3 月	

※8 月の実地調査、訪問活動に関しては、生徒自らが訪問先に対して、訪問の趣旨説明や日程調整のための連絡等を行った。

探究テーマ：虎舞を後世に伝えよう

【調査活動①】
佐々木畳工業店さんにご協力いただき取材させてもらいました

「火伏せの虎舞」は、1339年に城主が火災除けを願い、初午祭で虎舞を奉納したのが始まりと伝えられます。
その後、火難防止と繁栄を祈る祭りとして広まり、現在は4月29日に行われています。

虎舞の歴史を保存会の方々にインタビューしました。

調査した虎舞の歴史や伝承の方法、現在の虎舞の意義などを検定としてまとめ、手軽に伝統に触れられるようにしました。

虎舞について知ろう

ぜひ、虎舞検定を解いてみてください。

※QRコードを読み取ればチャレンジできます。

1級　2級　3級

虎舞の種類：岡崎

名前の由来：地域の地名や、古くから伝わる囃子のリズムに由来するとされています。
内容：笛と太鼓の賑やかな囃子に乗せて、地元の小中学生2人1組が、頭と尻尾が付いた虎の胴幕を被って舞います。
披露の場：市街地の各家で舞った後、大通りや祭典本部の屋根の上で、猛々しく優雅に舞い踊るのが見どころです。

各部の魅力

1部

1部は首を揺らしながら前へすすむのが特徴で、
魅力は全虎が動きが揃っており、そこが統一感があり魅力となっております。

2部

2部は踊り方に決まりはなく自由なのが特徴です、さらに面は眉毛が生えていたり歯も生えているのが特徴です。

3部

3部はゆっくり落ち着いた雰囲気で踊るのが特徴ですが、面に威厳があり牙が生えており岡崎などになると迫力があり見ていても感動します。

３つに分かれている虎舞の違いや踊りの見どころを紹介する動画とスライドを作成しました。

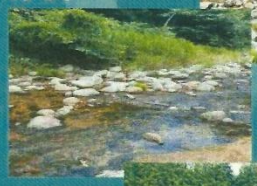
踊り方や衣装の解説動画を作成しました。

［加美町研究］

探求テーマ：知っているようで知らない加美町の自然の魅力

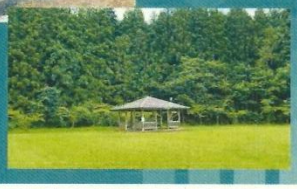
ゆーらんどキャンプ場の強み！！

→自然が間近にあり綺麗な川や森がある。



川・・・川の水が透き通ってて
とにかく透明！！

森・・・緑が多く、落ち着いた
雰囲気を感じれてリラックスできる。

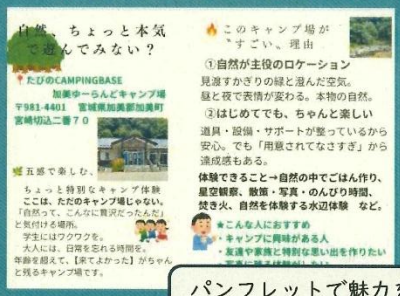


実際に訪れて肌で魅力を感じてきました。

探究テーマ：知っているようで知らない加美町の自然の魅力

活動②　～パンフレット作り～

目的　少しでも多くの方にゆーらんどキャンプ場を知ってもらいたい
　　地域の人が必ず行く場所に置いてもらうことで手に取りやすい
　　お金をかけず、幅広い年代の人に情報を届ける事ができるから



パンフレットで魅力を発信します。

探求テーマ：知っているようで知らない加美町の自然の魅力

活動③　券で安くてお得に！！

まだ加美町振興公社の方と計画中ですが 2027年12月31日まで利用可能なクーポンを中新田中学校、明峰中学校、中新田高等学校の　三箇所に配る予定です。

クーポンを作成し、利用者増の方策を提案

温泉券を作ろうと思った理由
→加美町の住民に一人でも多くキャンプ場の温泉を利用してもらいたいと思った。
→キャンプの体験に行ったときに中・高生が少なく温泉をきっかけにもっと知ってもらおうと思ったから。
→加美町の課題である急速な人口減少、少子高齢化を少しでも解決していきたいと思ったから。

02 Activity

探求テーマ：加美町フード

活動①　ガチャガチャを作ろう！

・加美町スイーツを知ってもらうために、かみ～ごとコラボしたアクリルキーホルダーを作成し、町外の人がたくさん集まると思われる初午の日に販売する
・ガチャガチャにすることで、注目を集める
・特にガチャガチャが好きな子供向けに宣伝する

キーホルダー(ガチャポンによる)でスイーツを紹介、普及させる

04 Activity

探求テーマ：加美町フード

◎ガチャガチャづくりの工程

4、企画書作成、提出
5、段ボールでガチャガチャマシーンを作る
6、アクリルキーホルダーを注文する
7、宣伝する
8、販売する（初午まつり）

試作品を作る

試作品をもとに業者に製品として発注。

製品化されたキーホルダーは、スイーツの魅力をしっかりと伝えてくれそう。

都合により販売ではなく、初午祭りで限定配布を予定。

［加美町研究］

［ 活動目標 ］

テーマ目標
冬の加美町食べ歩きスタンプラリーのPR動画を作成

イベントの紹介動画を通して賑わいを加速

活動のその後

- 町内のグルメスポットやスタンプラリーを通して加美町を活気つける
- イベントの告知
- PR動画を作成して沢山の人にお店に訪れてきてほしいから

［ スタンプラリー宣伝 ］

参加方法について

①参加店舗で５００円以上の食事をする

②店舗で配布しているリーフレットにスタンプを押印

③スタンプを最低３店舗分集めることで...

④応募可能！！（スタンプ3個から）

★全店制覇賞：もれなく全員に
①オリジナルら～めんどんぶり
②参加店で使える食事券3,000円分

※全店舗制覇賞のどんぶり

★１０店舗賞：
5,000円相当加美町特産品詰合せ　５名

★ ３店舗賞：
①かみ～ごグッズ（3,000円相当詰合せ）５名
②3,000円相当 加美町特産品 １５名
③参加店舗食事券等 2枚 ７０名

イタリアンレストラン
「ピッチョーネ」

地元有名ラーメン店
「齋虎」

1.加美町で釣りのできるスポットについて

この辺に鮎などの魚が釣れやすい！！

地元有名ラーメン店

「齋虎」

自分たちは何も釣れなかった

実際に釣りを体験して難しさを実感。

釣りのスポット紹介をするはずが。

2.加美町で釣れる魚の種類について

その他にも…

・ナマズ

・錦ごい

・サケ

・スッポン

など35種以上

漁業組合の方から地元で釣れる魚をはじめとした水生生物を学んだ。

4.情報

鳴瀬川では多くの魚が釣れ、夏には**鮎フェス**を開催していて誰でも簡単にあゆに触れることができる

中新田といえば「鮎」と言えるほど有名な特産。

「鮎」に焦点を当てた祭りも存在している。

加美町により活気がでるように、釣り班でしたことは「**加美町で釣れる魚使ったゲームの開発**」です。

無料の教育プログラミング「Scratch」を使って釣りゲームを作成。

（３）運営指導委員会

新学科設立を契機に、一層、地域に根ざした開かれた学校づくりを推進し、地域とともに地域課題に取り組み、地域を担う社会人として必要な資質・能力を高めることを目的とした教育活動を展開することから、学識経験者、外部有識者等で構成する運営指導委員会を組織し、専門的見地から検証を行い、本事業の改善を進めた。

イ　運営指導委員

所属	氏名
宮城大学事業構想学群　教授	中田　千彦
仙台大学体育学部健康福祉科　教授	氏家　靖浩
産業能率大学経営学部教授 株式会社 Prima Pinguino　代表取締役	藤岡　慎二
加美町立中新田中学校校長	小野寺　英一
加美町立鳴峰中学校校長	目々澤　辰悟

ロ　委員会開催について

＜１回目＞

日　時　　令和７年６月２５日（水）　午前１０時００分から午前１１時３０分まで

会　場　　オンライン会議

出席者　　運営指導委員：中田委員、氏家委員、藤岡委員、小野寺委員、目々澤委員

宮城県教育庁高校教育創造室：

永田室長、菅野主幹（班長）、上園室長補佐、目黒主査

中新田高校　：早川校長、木村主幹教諭

次　第　　（１）開会

（２）挨拶　宮城県教育庁高校教育創造室長 永田 靖和

運営指導委員会委員長 挨拶 宮城大学 中田 千彦 教授

（３）報告・協議

報告Ⅰ　普通科改革支援事業について（宮城県教育庁高校教育創造室）

報告Ⅱ　令和６年度事業報告　（中新田高等学校）

協議Ⅰ　令和７年度事業計画　（中新田高等学校）

協議Ⅱ　令和８年度事業の主な取組について　（中新田高等学校）

指導助言

（４）諸連絡

（５）閉会の挨拶　　中新田高等学校長 早川 健次

（６）閉 会

＜２回目＞

日　時　　令和８年２月２日（月）　午後１時３０分から午後３時３０分まで

会　場　　オンライン会議

出席者　　運営指導委員：中田委員、氏家委員、藤岡委員、小野寺委員、目々澤委員

宮城県教育庁高校教育創造室：

永田室長、菅野主幹（班長）、上園室長補佐、目黒主査

中新田高校　：早川校長、鈴木教頭、木村主幹教諭

次　第　　（１）開会

（２）挨拶　宮城県教育庁高校教育創造室　永田 靖和　室長

運営指導委員会委員長挨拶　宮城大学　中田 千彦 教授

（３）報告・協議

報告Ⅰ　（仮称）未来創造科について（高校教育創造室）

報告Ⅱ　探究活動発表会について（中新田高等学校）

報告Ⅲ　（仮称）未来創造科の教育課程について（中新田高等学校）

・令和９年度入学生教育課程

・学校設定科目の学習内容

報告Ⅳ　ドローンショーについて（中新田高等学校）

報告Ⅴ　生徒の非認知能力の育成について（中新田高等学校）

協議Ⅵ　令和８年度事業計画について（高校教育創造室）

指導助言

（４）諸連絡

（５）閉会の挨拶　　中新田高等学校長 早川 健次

（６）閉 会

ハ　指導助言

〇氏家委員

・普段から中新田高校の FaceBook やインスタグラムを見ており、そこの情報の裏事情が良くわかった。

・ドローンショーは表現方法の１つであり、ドローンショーを通して何を伝えるのか、何をするのかをもっと練って欲しいと思う。

・教員には異動があるが、異動してきた先生が「地域創造学には興味がなく関わらない。」、「従来型の授業を行うだけ。」という状態ならないようにして欲しい。地域創造学の授業を行うことで、教える側の教員にとって、キャリアアップにつながるように、管理職の先生には図らって欲しいと思う。

・防災について、中新田高校が指定避難所になっているのかと思うが、高校生が避難所運営する側に立ったときに行うことを学んで欲しいし、学校にいるとき、あるいは通学中に被災したときに、自宅までどのように帰るのかという方法を考えて欲しい。これらの学びは宮城県ならではだと思う。

〇藤岡委員

・発表することや質問に答えることが苦手な生徒たちが頑張っている様子が分かった。

・地域がまちづくりの方向性をどう考えているのか、どういうまちづくりを行いたいのかということを踏まえる必要があるのではないかということである。少し前までは地域の人口を増やすにはどうしたら

良いかという議論であったが、これから地域の人口は増えないので、持続可能な地域となるためにはどうすべきか等を生徒や先生、地域の人としっかりと議論した方が良いと思う。
・「地域」を強調し過ぎると、「地域」でしか活躍できないイメージができてしまう。加美町で探究したことが加美町以外に生徒が出たときにどう生きるかということが重要である。
・探究内容が「社会課題の解決」に偏ると興味がない生徒も一定数いるので、中学校へのメッセージとしても「社会課題の解決」以外の探究もできるという含みがあった方が良い。
・ドローンを使うことがまちづくりにどう影響するのかということ、加美町のまちづくりとどう関わるのか生徒同士で考えさせた方が良いと思う。

〇小野寺委員
・１月２２日の探究活動発表会に参加させていただいた。中学校のときに関わった生徒もいて、高校生になって成長した姿が見られて良かった。中学校でも探究学習を行っていて、今回の発表会のようなものも行っており、中には同じような発表もある。
・中学校と高校の大きな違いは、探究活動が就職などの将来の自分のキャリアにつながっていくものであるということだと思う。
・探究活動のような学習は教員の熱量が大きく影響するので、先生方には頑張ってほしい。

〇目々澤委員
・探究活動を活発するには、課題（テーマ）を自分ごとにすることではないかと思う。まちの課題をいかに自分の課題にできるかであると思う。
・加美町の課題は商店街だけではない。加美町の活性化のために移住してした人の話では、林業について、木はあるが、それを活用する場所がないということが課題であるそうだ。地域にある様々な課題を、子どもが自ら考え、地域への理解を深めること大事である。そのためには地域の関係機関との協働体制が重要だと思う。

〇中田委員長
・熊や山火事など不可抗力で起きる災害から身を守ることや予防的対応について学ぶことが必要だと感じる。
・高校の教育を改善し、社会のインフラとしてどう考えるか、社会課題をどう捉えていくか、課題を顕在化させて高校教育に取り入れることは良いが、高校の課題解決型の学習が社会課題を解決する装置の役割を担うものではないと私は考える。
・高校で社会課題の解決型学習を行うことで、社会（企業）のコストを下げると思う。
・コーディネーターが地域と生徒をつなぐ、あるいは、社会課題の実際のスケールと高校生の感じるスケールの間に入るスポンジのような役割を果たすと良いのだと思う。
・ドローンショーはＤＸの教材として魅力があると思う。但し、操作して終わりではなく、ドローン操作を学ぶ目的を確認する必要がある。
・学校独自の学校設定教科を設定し、特色ある教育活動を行っている中新田高校の取組を引き続き応援していきたい。

（４）学校運営協議会（コンソーシアム）

イ　学校運営協議会委員

	氏　名	所　　属	部会
1	鎌田　稔	加美町教育委員会	第二部会
2	松倉　裕樹	加美町商工会	第一部会
3	佐々木　嘉昭	加美町観光まちづくり協会	第二部会
4	米津　岳	リロカリコクリ株式会社	第二部会
5	佐々木　崇	アスカカンパニー株式会社	第一部会
6	高橋　麻美	加美町スポーツ協会	第二部会
7	大澤　史伸	東北学院大学地域総合学部	第一部会
8	工藤　健一	東北福祉大学共生まちづくり学部	第二部会
9	鎌田　裕充	加美町役場危機対策課	第二部会
10	後藤　崇史	加美町役場企画財政課	第二部会
11	渋谷　勇太	加美町役場ひと・しごと推進課	第二部会
12	中山　芳治	加美町役場農林課	第二部会
13	早坂　大祐	加美町役場商工観光課	第二部会
14	田中　周治	加美町教育委員会教育総務課	第一部会
15	今野　清人	元中新田高等学校父母教師会長	第一部会
16	佐々木　寛	中新田高等学校父母教師会長	第一部会
17	菅原　江美	中新田高等学校同窓会	第一部会
18	早川　健次	中新田高等学校	

※　第一部会・・・学校魅力化・全国募集
　　第二部会・・・学校設定科目・地域連携

ロ　開催日程について

＜会議＞

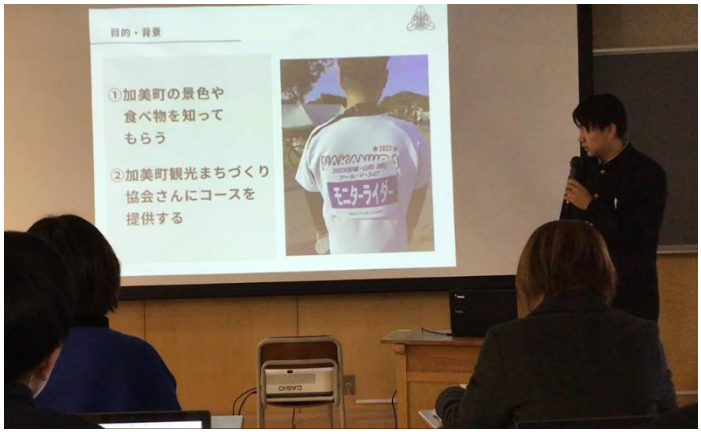
年月日	時間	会議	会場
令和７年 ５月２７日（火）	15:00～16:00	第１回　全体会	中新田高校 会議室
７月１１日（金）	16:00～17:30	第１回　第一部会	〃
８月２６日（火）	16:00～17:30	第１回　第二部会	講義室
１１月１８日（火）	16:00～17:30	第２回　第一部会	会議室
１２月１５日（月）	16:00～17:30	第２回　第二部会	〃
令和８年 ２月２５日（水）	16:00～17:30	第２回　全体会	〃

＜研修会＞

・１月２２日（木）　１３：２５～１５：１５　　地域創造学発表会参観

２・３年の教養総合類型における、「地域産業」、「地域スポーツ学」、「地域防災学」の探究活動における取組成果発表会を行い、学校運営協議会委員の方々にも参加いただいた。

当日は上記委員の他、県教育委員会、加美町教育委員会、地域創造学協力者、近隣住民の方々、県内他校の先生方にも参加いただき、助言をもらうことができた。また、県外校からのオンライン参加もあり（うち１校は探究の時間を合わせて１年生全員が参加）、非常に有意義な発表会となった。



・２月２５日（水）　１０：５０～１２：４０　　探究活動成果発表会参観

地域創造学の取組発表に加え、１年生の「加美町研究」、２・３年生の教養総合類型以外の生徒による探究活動の発表会を全校行事として開催し、ここにも学校運営協議会委員の方々に参加いただいた。

また、当日は県教育委員会の方々、本校や加美町と包括的連携協定を結んでいる大学の先生、探究活動に関わる民間企業の方にも発表を見ていただいた。

（5）県外学校視察

イ　岩手県学校視察

県外視察報告書（岩手県 西和賀高等学校・大槌高等学校）

1　視察の目的

本視察は、人口減少・少子化が進行する中山間地域・沿岸地域に立地する県立高等学校が、自治体と連携しながら存続・発展を図っている先進事例を調査し、本校の今後の教育活動及び学校魅力化の方策を検討するために実施したものである。

2　視察概要

視察日：令和７年１２月１１日（木）～１２日（金）

視察先：岩手県立西和賀高等学校、岩手県立大槌高等学校

参加者：工藤・鈴木・金山・田中（教育委員会総務課）

3　地域・学校規模および予算の比較

区　　分	人口/生徒数	全国募集生徒数	高校関連予算	教員以外の担当者（CN 等）
西和賀町/ 西和賀高校	4 千人/ 136 名	県外 7 名 県内 13 名	約 7,000 万円	推進員 2 名＋旅館（寮母）＋生活ｻﾎﾟｰﾄｽﾀｯﾌ（同窓会）＋ﾊｳｽﾏｽﾀｰ（募集中）
大槌町/ 大槌高校	1 万人/ 161 名	県外 14 名	約 6,000 万円	CN 4 名常駐（NPO カタリバ）＋生活支援（SSW）等 3 名常駐＋各民宿女将
加美町/ 中新田高校	2 万人/ 215 名	県外 2 名	約 500 万円 以下	非常勤講師（林）1 名

※高校関連予算はいずれも高校魅力化・生徒支援・コーディネーター配置等に充当されている概算額

4　西和賀高等学校の取組と特徴

（1）教育活動・学校運営

少人数制を生かし、生徒一人ひとりに役割を与える学校運営を行っている。学校行事についても、生徒会および各委員会を中心とした生徒主体の運営が定着している。定期考査は原則廃止し、学年末に国語・数学・英語の 3 教科のみで学力評価を実施している。日常の学習状況や活動の過程を重視した評価に転換している点が特徴である。情報および地理については、担当教員未配置のため、盛岡市内高校と連携した遠隔配信授業を実施しており、既存の ICT 環境を活用した柔軟な教育課程編成が行われている。生徒指導については比較的厳格な方針を採っており、服装指導やスマートフォン使用の制限を明確にしている。過去に大きく荒れた時期を経て学校全体は落ち着いているが、近年は新入生の状況を注視している段階である。

（2）進路指導・学習支援

生徒１人に対し複数の教員が関わる進路指導体制を構築しており、進路希望達成率は100%を維持している。町の負担により、小論文講座を年４回実施しているほか、公営塾事業として外部講師による課外授業や大学入試対策講座を無料で提供している。

（3）探究活動・地域連携

「いのち輝く百年創造塾（総合的な探究の時間）」を中心に、西和賀町と連携したまちづくり探究を実施している。地域からの要請に基づき、田植え、リンドウ栽培、雪かきなどのボランティア活動に生徒が参加しており、日常的な地域貢献を通して高校への信頼と感謝が醸成されている。

（4）生徒支援・生活面

通学費、寮費、模試・検定料、海外派遣語学研修費等について町が手厚い補助を行っており、令和７年度には高校関連として約7,000万円の予算が計上されている。留学生については、三者面談の際に保護者の来校を原則とし、居住環境の確認も行っている。不登校や寮生活に馴染めない生徒については町内アパートを借り上げるなど柔軟に対応し、その費用も町が負担している。欠席連絡は保護者または寮母から行われ、寮運営や生活指導は寮母、生活支援員、町職員が担い、学校は直接関与しない役割分担が徹底されている。

（5）募集活動・部活動

合同説明会には約50名が参加し、対面型オープンスクールには８名程度が参加、そのうち５名が受験に至っている。学級増については、西和賀町が主体となって署名活動を行い、県に提出した結果、実現に至った経緯がある。部活動は任意加入制として３年目であり、近年は加入率が低下傾向にある。過去10年間で４つの部活動が廃止されているが、いずれも規程に基づく整理であり、学校側が積極的に縮小したものではない。

5　大槌高等学校の取組と特徴

（1）人材配置と役割分担

生活支援員等を含むコーディネーター４名が常駐し、全国募集、留学生対応、地域連携、学校広報（HPやSNSの運用）を担っている。昨年度、合同説明会に約４０組が参加し、そのうち対面のオープンスクールには約１５組が参加、最終的に７組（再チャレンジ生徒０名）が受験している。「学校魅力化の第一歩は私たちの働き方から」をスローガンに、働き方改革を推進している。教員は教科指導と生徒指導に専念できる体制が構築されており、生徒の生活面・対人関係・保護者対応については、生活支援員が中心となって対応している。全国募集開始当初は、不登校経験のある生徒や対人関係に不安を抱える生徒も在籍していたが、生活支援員が家庭・民宿（下宿）・学校のパイプ役となり、きめ細かな支援を実施してきた。一定期間登校が困難となった場合には、一度自宅へ戻し、保護者と今後の方針を協議するなど、無理のない対応を行っている。日常生活面では、清掃指導や生活習慣の確認、朝の登校準備の声がけまで生活支援員が関わり、現在は不登校や大きなトラブルは発生していない。留学生数の増加に伴い、留学生同士の交流行事やレクリエーションも実施されている。

（2）自主活動組織「復興研究会」と「はま研究会」を核とした地域連携

自主活動組織である復興研究会とはま研究会は任意参加であるにもかかわらず、全校生徒１６２名中９７名（約６０％）が参加している。活動日は固定せず、生徒の主体性を生かした地域連携活動が展開されている。定点観測による復興記録、他校交流や防災学習、産業振興、海の生物の研究や水族館の運営、海洋漂着物の調査など、多面的な活動を通して、地域との強固な協働関係を築いている。

（3）総合的な探究の時間の体系化

１学年では自己理解と地域理解を軸に、中学生への発信、役場職員へのヒアリング、町の課題調査を実施している。町外の先進事業者への訪問調査を行い、課題解決案を町議会において町長・議員の前で提案している。２学年ではマイプロジェクトとして個別テーマ研究を行い、全国の高校とオンライン連携授業を実施している。３学年では専門家インタビューや「18 年間で身につけた武器」をテーマとした発表を行い、進路意識の深化につなげている。

（4）キャリア教育・インターンシップ

金曜日を学校設定科目の日とし、特色あるキャリア教育を実施している。年４回（各２日間）のインターンシップを実施し、移動費・事業所謝礼は全て町が負担している。事業所調整や連絡は町職員が担い、学校の負担軽減が図られている。

（5）生徒指導

生徒が任意で活動する校則検討委員会を立ち上げ、常に校則の見直しを図っている。全校生徒の意見集約、教員との話し合い、使用期間の設定・調査、具体的なルールの決定と周知を担った。校則の見直しに関わる全国イベントに生徒２名を出席させた。今年度の具体的な成果として、ツーブロックの髪型を許可。スマホを「禁止」から「休み時間のみ許可」に変更。軽装として夏のポロシャツを作成・導入した。また、今後の予定として令和９年度からの制服変更に向けた投票を実施中。現校長は服装指導など生徒指導の緩和化に言及しており、厳格な指導のメリットが少ないと考えている。部活動については、やりたい生徒がおり、大会に出場できる人数がいれば、すぐに部活動を設置している。

6　得られた知見

本視察を通して、両校に共通して確認できた最大の知見は、「高校の存続・魅力化を自治体の最重要政策の一つとして位置付けている」という点である。西和賀町・大槌町ともに、人口減少や若者流出という厳しい現状を前提とした上で、高校を地域の中核的な人材育成拠点と捉え、財政支援や人材配置を長期的視点で行っている。その結果、高校教育が単なる学校内の取組にとどまらず、町づくり・人づくりと一体化した施策として機能している。

特に印象的であったのは、教員以外の専門人材（コーディネーター、生活支援員、公営塾講師等）が明確な役割分担のもと配置されている点である。これにより、教員は教科指導や生徒理解に専念でき、生徒は学習面・生活面・進路面を切れ目なく支援される環境が整えられていた。こうした体制は、教員の負担軽減のみならず、教育活動の質と継続性を高める重要な要素であると考えられる。

また、総合的な探究の時間が体系的かつ段階的に設計されており、学年進行に応じて「自己理解 → 地域理解 → 課題解決 → 社会への発信」へと発展している点も大きな知見であった。特に大槌高校においては、町議会での提案や地域住民への発表など、実社会と直結したアウトプットの場が設定されており、生徒の主体性・表現力・社会参画意識の育成に大きく寄与している。

さらに、インターンシップやボランティア活動を通じて、生徒が地域から「役に立つ存在」として認識されていることが、学校と地域の信頼関係を強固なものにしている点も確認できた。これらの取組は、生徒の自己肯定感を高めると同時に、地域側にとっても高校を支える意義を再確認する好循環を生み出している。

7　本校への活用の可能性

本校においてこれらの取組を活用していくためには、まず高校の在り方を「学校単独の課題」ではなく、「町全体の将来に関わる課題」として再定義する必要がある。西和賀町・大槌町の事例からは、自治体と高校が危機感とビジョンを共有し、役割分担を明確にした上で連携することが、持続可能な学校運営の前提条件であることが示唆された。

具体的には、教員業務の一部を担う外部人材（探究活動コーディネーター、キャリア支援人材等）の配置について、町・教育委員会との協議を段階的に進めることが考えられる。すべてを一度に導入することは困難であるが、まずは総合的な探究の時間や地域連携活動の調整役を外部に委ねることで、教員の負担軽減と取組の質向上を図る余地がある。

また、総合的な探究の時間については、地域理解や職業理解にとどまらず、地域課題の調査・提案・発信までを見据えた体系的な設計が求められる。町職員や地域事業者へのヒアリング、成果の地域公開などを取り入れることで、生徒が学びの意義を実感し、進路選択と結び付けて考える機会を創出できると考えられる。

さらに、現在500万円以下にとどまっている高校関連予算については、他自治体の事例を踏まえつつ、町の施策全体の中で位置付けを見直す必要性がある。予算規模の大小そのものよりも、「何のために、どの分野に重点配分するのか」を明確にすることが重要であり、その検討材料として本視察で得られた知見は大いに活用可能である。

以上の点を踏まえ、本校としては、町・教育委員会との継続的な対話を通じて、小規模校ならではの強みを生かした教育活動の再構築を図っていくことが求められる。

以上、県外視察の報告とする。

□　関西方面学校視察

関西地区 高等学校視察報告書

（守山北高等学校・追手門学院中学・高等学校）

1. 視察の目的

本視察は、各校における普通科改革・探究的な学びの実践および学校改革のプロセスを把握し、今後の教育活動や制度設計に向けた示唆を得ることを目的として実施したものである。
特に、公立高校と私立中高一貫校という異なる制度環境において、どのように理念を形にし、学びを構築しているかに着目した。

---

2. 視察概要

(1) 守山北高等学校

- **日時**：1 月 29 日（木）14:00～16:00
- **場所**：もりきたベース（校内探究スペース）
- **対応者**：髙田先生、林先生（事務室長）、上田 CN

(2) 追手門学院中学・高等学校

- **日時**：1 月 30 日（金）10:00～12:00
- **場所**：追手門学院中学・高等学校
- **対応者**：辻本 教頭先生、牛込先生（創造コース部長）

---

3. 守山北高等学校の取組概要

(1) 普通科改革・新学科設置の背景

守山北高等学校では、普通科改革の採択以前は具体的な構想がなく、校長および県とのやり取りが中心となっていた。そのため、当初は教員間の意思疎通が十分に図られず、たたき台を提示する形での合意形成はうまく機能しなかった。

しかしその後、教員研修を通じて「もりきたでしか学べないこと」を全教員で議論するプロセスを重ねたことで、共通理解が形成され、結果として有意義な改革プロセスとなった。

（2）探究・評価の考え方

探究活動の評価においては、生徒の自己評価を成績には反映させず、教員が確認・振り返るための資料として活用している。また、5段階評価は探究の性質にそぐわないとの認識から、事前の協議および運営指導委員会での議論を経て採用しない方針とした。

学期ごとの整理としては、1・2学期に活動内容を記録し、学年末に1年間の学習内容と評価を文章でまとめる形を取っており、生徒のモチベーションにつながる評価の在り方が重視されている。

（3）体制・地域連携

2年目の職員研修では「今を知る」ことをテーマとし、毎月の職員会議で新学科に関する報告を行っている。CN（コーディネーター・ナビゲーター）として配置されている上田氏は、立命館守山での探究指導経験を有しており、公立高校の探究への応用が期待されている。

地域連携については、2年目までは生徒会が中心となって担っていたが、マンネリ化が課題となったため、3年目からは「iGrow」や「MORIKITA BASE」を本格活用している。話し合いは活発になる一方で、聞く側の集中度には課題が残っている。

インターンシップは新学科から開始され、商工観光課・企業連携室が受け入れ先を担当している。

（4）課題認識

新学科が1クラスのみであることによる固定化の懸念や、「学校出願」という受験制度の影響により、探究を目的として入学する生徒が少ない点が課題として挙げられた。また、予算については守山市と県のどちらが所管するのか不透明な部分があり、コンソーシアム化についても形式的なものになる懸念が示された。

---

4. 追手門学院中学・高等学校の取組概要

（1）学校改革の背景とプロセス

追手門学院では、2015年を教育の大転換期と捉え、経営陣より根本的なコンセプト設定の必要性が示された。2017年頃から基本構想が始まり、2019年に校舎建て替えが完了している。

改革はトップダウンではなく、約1年をかけて現場主導で進められ、「どんな人を育てたいか」「どんな学びが必要か」といった問いについて、教員同士が泥臭く議論を重ねてきた。

（2）理念と組織体制

ミッション（北極星）には「個人と世界のWell-being」が掲げられ、「幸せになってもらいたい」という明確な価値観が共有されている。学びの中身は学習推進部が一元的に設計・統括し、進路や生徒指導とは役割を明確に分けている。

（3）創造コースの実践

創造コースは「違うことが良い」とされる生徒の集団を意図的につくるために設置され、全体改革ではなく1クラスのみの設置としている。生徒のオーナーシップについては発展途上であるものの、自主決定を重ねることで成長を促す設計となっている。

探究活動については原則として評価を行わず、プレゼンテーションも必須とはしていない。現在はアート作品を通じて表現する形を取っており、評価がないことが生徒の満足度向上につながっている。

（4）評価・カリキュラムの考え方

定期考査の代替として、考査期間にプロジェクトを実施し、フィードバックを行っている。他教科では必要な単元を扱い、授業内での確認テストを実施している。総合的な探究については文書評価を要録に記載し、学年で一定の共通性を保ちつつ、生徒ごとの濃淡をつけている。

5. 両校の比較から得られる示唆

守山北高等学校は制度起点で改革が始まり、後から現場で意味づけを行ってきたのに対し、追手門学院は理念（北極星）を起点として制度や学びを設計している点が大きな違いである。一方で、両校ともに1クラスのみの改革を「実験場」として位置づけ、教員の納得や対話を重視している点は共通している。

また、評価についても、守山北が「どう評価するか」を模索しているのに対し、追手門学院は「評価しない」選択をしており、公立と私立の制度差が顕著に表れている。

6. まとめ

本視察を通じて、学校改革においては制度や手法以上に、教員間で理念を共有し続けるプロセスそのものが重要であることが確認された。公立・私立という立場の違いはあるものの、それぞれの制約の中で工夫を重ねている点は、今後の学校づくりにおいて大きな示唆を与えるものである。

（６）Ai GROW による非認知能力（コンピテンシー）測定

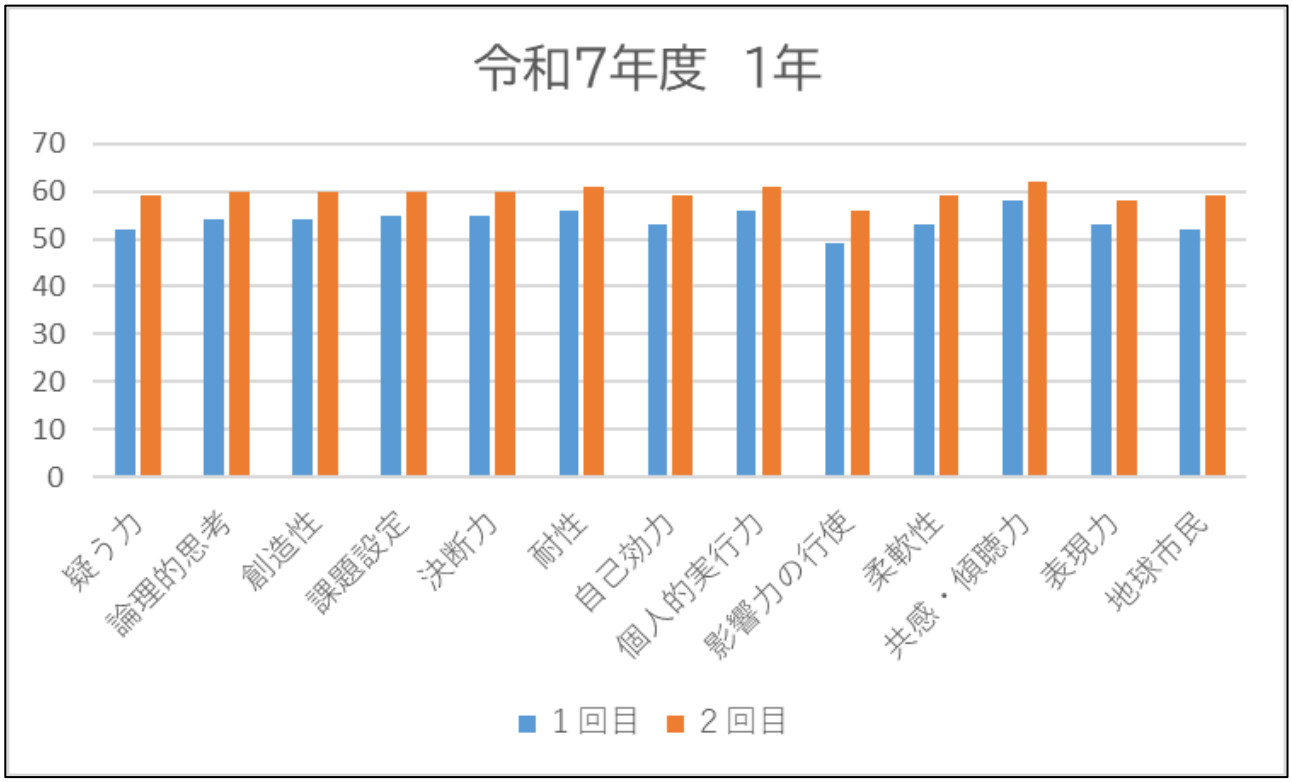
IGS 株式会社が開発した「Ai GROW（アイグロー）」を用いて生徒の「非認知能力」（コンピテンシー）を測定した結果を示す。今年度は年間２回の測定を行い、教育活動によって、どのように生徒が変容していくかを確認した。

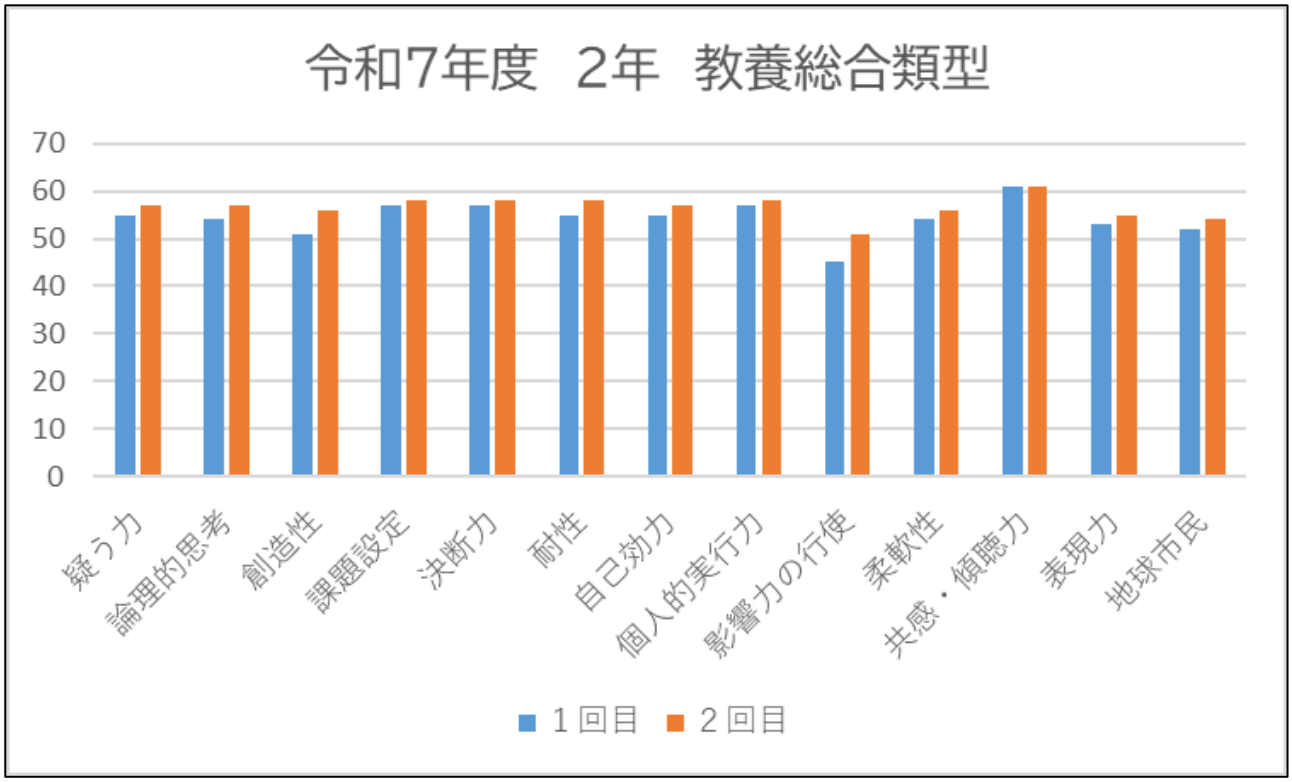
１年生については学年全体の平均、２・３年生については教養総合類型の生徒（地域創造学の取組を行っている生徒）の平均、教養総合以外の類型の生徒（商業実務類型・文理医療類型）の平均について、１回目測定と２回目測定の数値を比較している。

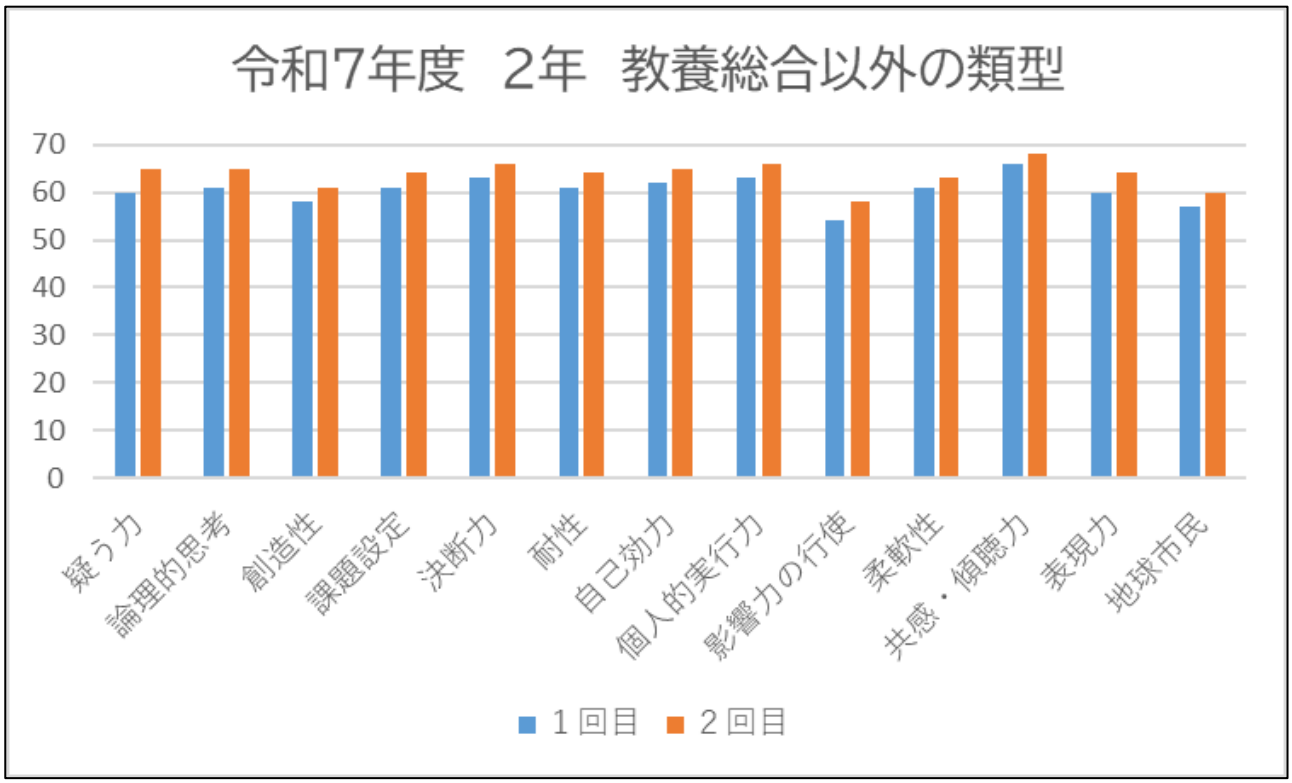
全体的に１回目よりも２回目の数値が高くなっていることが読み取れる。３年生に関しては、行事の関係で２回目測定の時期がかなり遅くなってしまった。そのため回答率がかなり低い状態になってしまい、正常な比較ができなくなってしまったことは反省点である。

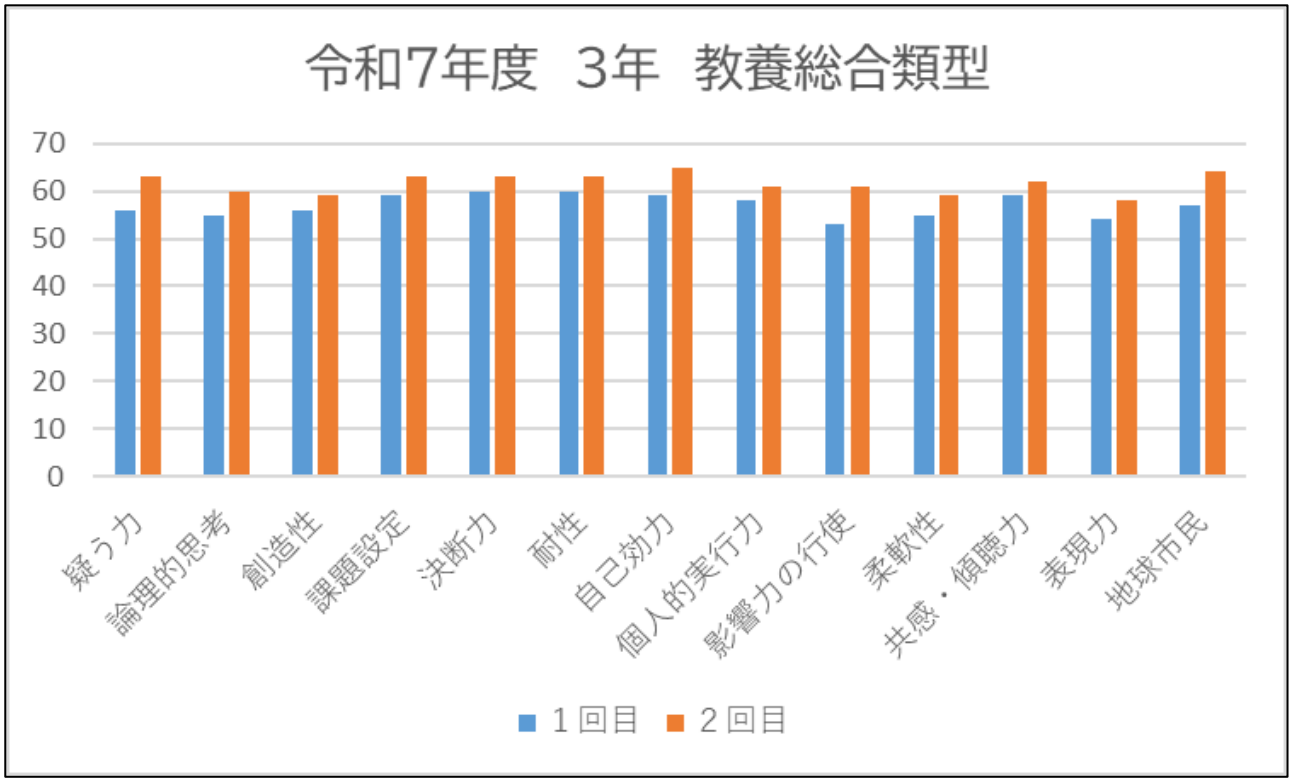
＜測定時期＞

１年生　…　１回目：５月、　２回目：１２月
２年生　…　１回目：７月、　２回目：１２月
３年生　…　１回目：５月、　２回目：２月

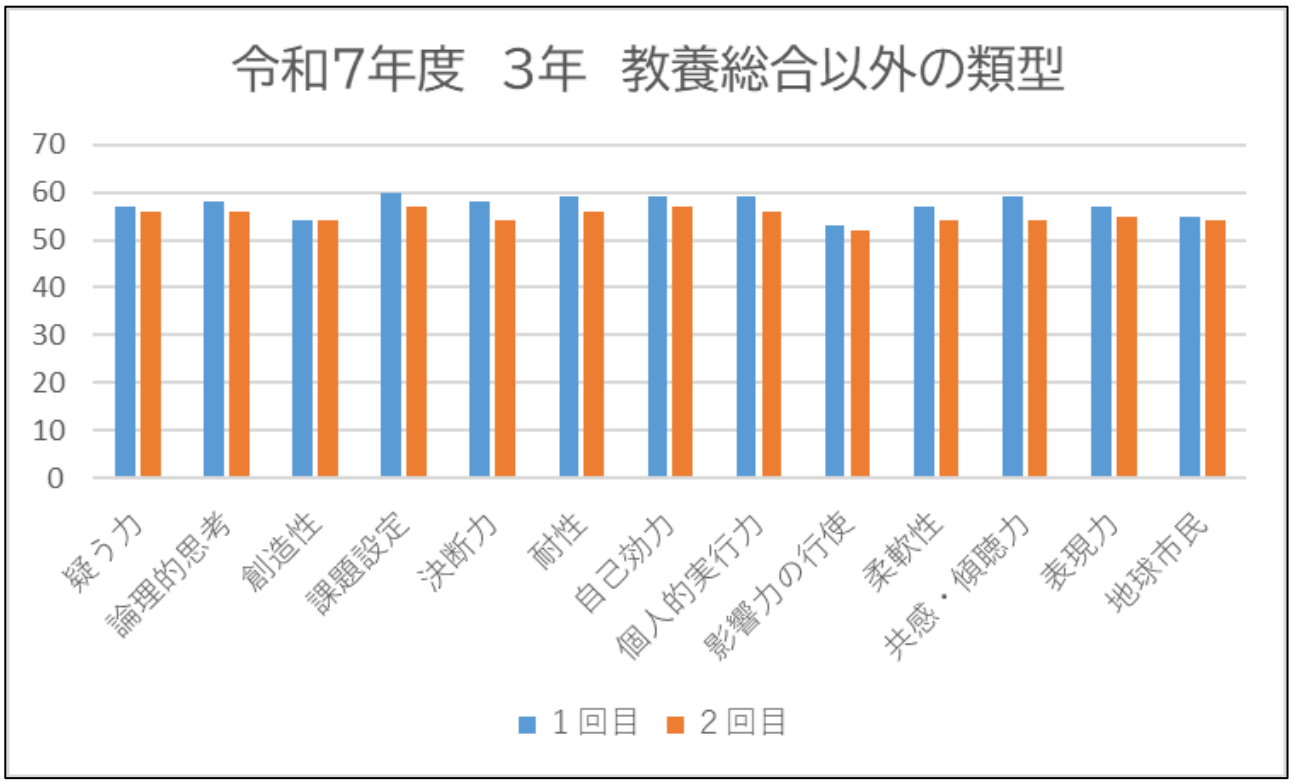



令和7年度　2年　教養総合類型
70
60
50
40
30
20
10
0
疑う力
論理的思考
創造性
課題設定
決断力
耐性
自己効力
個人的実行力
影響力の行使
柔軟性
共感・傾聴力
表現力
地球市民
1回目
2回目


令和7年度　2年　教養総合以外の類型
70
60
50
40
30
20
10
0
疑う力
論理的思考
創造性
課題設定
決断力
耐性
自己効力
個人的実行力
影響力の行使
柔軟性
共感・傾聴力
表現力
地球市民
1回目
2回目



※２回目の測定人数が少なく、１回目との比較が難しいが、参考として掲載



※２回目の測定人数が少なく、１回目との比較が難しいが、参考として掲載

令和７年度
新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）
研究実施報告書　第２年次

発行日　令和８年３月
発行者　宮城県中新田高等学校
〒981-4294
宮城県加美郡加美町字一本柳南２８
電話　0229-63-3022　FAX 0229-63-3023
メール　nakani-h@od.myswan.ed.jp